

私の両親は一度も私の舞踏の公演を観に来たことがない。もう千回以上も舞台をやっているのに、である。そうしているうちに母親はもう鬼籍に入ってしまった。このことを言うと、欧米の人々は驚愕する。特にカソリックの国の人たちは、「家族は皆、理解しあうべきだ」という基本理念があるので、信じられないくらいに大きな反応を示し、それは悲しむべきことだと言う。日本では戦前生まれの両親と戦後生まれの子供

達には大きな価値観の隔絶があつて、かつて女性は良き妻、良き母となることが理想とされ、アングラの前衛舞踏などんでもない、けしからぬこと、恥ずべきことだつたということが伝わりにく

いのだ。一方、両親は日本舞踊は応援してくれていた。名取りや師範の資格を取った時に、東京の舞台を神戸から観に来てくれたこともある。ではどつして一般の市民から伝統芸能は歓迎され前衛舞踏は望まれないのか？

舞踏(BUTOH)と日本の伝統芸能の係わり

私の舞台について書かれる記事には一九九五年あたりから「伝統(古典)と前衛(コンテンポラリー)の融合」云々というフレーズが必ず付くようになって来た。ここで伝統とコンテンポラリーについて考えてみよう。舞踏は世界のダンスのどこに位置付けられるのか。フランスにおけるジャンル分けでは、

舞踏(Buto)はコンテンポラリー・ダンス(Danse contemporaine)とは別の独立したジャンルとされているときもあり、コンテンポラリー・ダンスの一部とされるときもあるが、ともかく舞踏は、民族芸能でもなく伝統芸能でもない、現代舞踊の中のひとつとして位置付けられている。

舞踏は一九五九年に土方巽というダンサーによって創設された踊りなので、まだ四十数年の歴史しかない。従って単純に長さの点で言うと、百年以上の歴史がある芸能が数多ある中で、歴史の浅い舞踏は伝統芸能には入らな

伝統と現代性の狭間で

——フランスから見た日本

●文●有料珠々
(ALISHINA Jujū)

*photo: Marcus Liebenz, Dancer: Jujū Alishina 1999



品を「東北歌舞伎」と名付けたところ、能の技術である摺り足を舞踏に取り入れたところに、舞踏と伝統芸能の接点を感じられる。その為か「舞踏は伝統芸能である」「舞踏は、日本の伝統芸能が進化した踊りである」と捉える人々が海外には少なくない。

舞踏のヴィジュアル的特徴である坊主や白塗の異形にボロボロの衣裳が裸体、抽象的なテーマに緩慢な動き、肉体的な表現、簡素な舞台装置、主役と群舞の間の厳格なヒエラルキー、聖俗の入り交じった身振りに時々感じられる現代的なユーモア……。このような舞踏の特徴は七〇年代に当時のアングラ演劇と交互に影響し合いながら形成されて来たものである。

舞踏の創始者の土方巽はモダンバレエやノイエタンツなど西洋の踊りに傾倒し、修練していたといわれ、能や日本舞踊から踊りに入ったわけではない。それでも土方巽が三味線音楽を使ったり、自分の作

男性によるドレスの着用、それも「女装」という概念を通過しない女装、自然物(土、砂、水、他)の舞台使用、裸体でうずくまり、四つん這い、獣の所作等々、舞踏由来のエレメントがあまりにコンテンポラリー・ダンスに混在しているので、もはや舞踏から取り入れたものとは認識されていない。

日本文化の紛らわしさ

欧米には「日本おたく」のような人々がいて、彼らは、能や歌舞伎、文楽の公演等が日本から来ると欠かさず行って鑑賞する。そして舞踏のようなわけのわからないものを見ると、こう言うときがある。「オレは、こう見えても日本には詳しいんだ。いいかい? あれは偽物だ。本物の日本文化じゃない」。

しかし舞踏は、最初から「本物の日本文化を伝えよう」という意図で作られたものではない。

例えば舞踏に使う衣裳にしても、風俗や階級を表現しているわけではない。舞踏で着物を使うとき「日本を表現している」わけでも「着物が日常着だった時代を復元しよう」としているわけでもない。その不自由さや重さを理由に使用している時もあるし、舞台効果

を考へての使用もある。多くの舞踏作品で着物は「正しい着方」所謂、着付け教室で教わるような着方ではなく、後ろ前に着る等、どこかを崩している。つまり着物は「着物」ではなく、「そういう形の衣裳」に過ぎないのだ。例えば、ページの写真は一見、伝統的な日本の衣裳に見えるらしいが、完全オリジナルであり、過去の日本の風俗を復元する目的でデザインされたのではない。舞台で同じ作品にドレスやスボンや着物が混然と同居しても時代考証は最初から無視されているのだから、矛盾はどこにもないのである。

一方、フランスに来る能や歌舞伎などの伝統芸術には博物館の価値、その時代の様子をディスプレイするという意味が大きいことから、「正しく」なければ意味がない。私も日本舞踊のクラスでは「正しい」着物の着付けを教えるし、「正しい」伝統舞踊を伝授するように努めている。

しかし、正しい日本伝統文化の伝授というのも、難しいものである。

それは、日本の着物が今日、街で着られる着物のようなかたちに定着して来たのは江戸時代からであり、その前は帯の形も着物の裁断も時代によって移

り変わりがあるし、どの時代のどの地方のものを指して「正しい着物」と言うのか。日本国外のものも混合している。日本文化の中でも「純粋な日本文化」だけを求めるのは難しいのではないかと? 歌舞伎の役者がよく使用する裾つぼみのパンタロンは安土桃山時代にポルトガルから輸入されたカルサオが原型であるし。

五社英雄監督の「鬼龍院花子の生涯」という映画がDVDになったものを観ている時、着物にバナマ帽を被った装いを見てうちの夫(フランス人)は「おかしい」としきりに言った。しかし、東西が混合した文化は大正時代の特徴なので、その時代の風俗としては、あれは伝統的な日本文化なのである。

日本舞踊も、現在稽古、公演されている曲の殆どは明治以降に構成されたものなので、「純粋な日本文化」のみを求めるのは難しい。

私がスペインで「元禄花見踊り」を踊った際、「録音の中に洋楽器が入っているのがおかしい」と指摘されたのだが、洋楽器が全く入っていない録音の音源をフランスからの距離で見つけるのは相当困難であるし、和楽器だけの演奏の曲は地味過ぎて大きな会場には不

向きなのだ。

現在では状況に変化がみられるものの、以前は日本舞踊の音源が乏しく、稽古や舞台で使用する音源は、ひどく時間とお金をかけて求めたものだった。日本舞踊の稽古は元々、稽古場で三弦を演奏してもらいながら行うものだったから、録音ものの市販が少ないのは、地味な職を減らさない為という話もあつたらう。しかし、名人が次々とお墓に入っている今日、高音質の録音を遺して欲しいと願うばかりである。

日本伝統芸能が振るわない理由

現代の日本では、日本舞踊を習う子供よりもバレエや洋舞を習う子供の方が、三味線や邦楽の教室よりもピアノや洋楽器の教室の方が圧倒的に多い。

日本の古典離れの原因は、自国の文化より外国の文化に憧れがあると西欧の方がカッコいい気がするとか、そういうものもあるだろうがそれだけでなく、古典離れは、古典の習得に時間・費用がかかりすぎるという理由が大きいのではないかと?

今の若者は、手取り早く舞台上に乗っかっている。
「舞踏のみで生活を立てている舞踏家」の数は、日本よりも海外の方が確実に多い。
システム力、組織力の差であろう。無意味な因習や情実、年功序列等の悪習を除き、都合の良い時間で欲しいものを欲しいだけ手に入れる合理的なシステム。結果がきちり数字で表せる制度。

さて、その日本文化愛好家たちの関心を現在、伝統文化よりもっと捉えてやまないものは何か?
現在、フランスではジャパン・ポップ、カルチャーなるものが席巻している。
ゲーム、アニメ、漫画、ポップ音楽など、このジャパン・ポップはヨーロッパには大きな市場を持っていて、売れに売れている。ほんの十年前までは日本文化と言えば、歌舞伎舞踊に琴の演奏、柔道に剣道、茶の湯に華道、盆栽、折り紙等であった。それが今では、日本フェスティバルと言えば呼び物はウィジュアル系ロックバンドやマンガアニメなどヨーロッパに輸入された日本ポップカルチャーである。

Japan Pop Culture

ももある。もちろん見る人が見れば型の確かさや間のとり方、重心の安定等に違いがあるのだが、洋舞のようにビルエドットの回数や跳躍の高さなど、数字で表せるものがない。
パリの日本文化会館で能楽についての講演会があったとき、「どうすれば能楽師になれるのか?」という質問が出た。シテの家に生まれればシテになれる、と壇上の人は答え、質問者は大変不服そうだった。フランス人が知りたいのは、何時間の実習を何回受ければどの段階まで行き、契約を交わして舞台上に上がるまでは何年かかるのか、そういう具体的な答えだった。実際は梨園の家に生まれなかった人は伝統芸能では殆ど未来がない。本人の資質や努力だけでは切り開けない。ましてや外人が歌舞伎役者や能楽師になれる可能性は極めて薄い。そういうところも、日本伝統芸能が振るわない理由であろう。
一体、誰が日本文化を救うのか?
それは、日本国外の日本文化愛好家たちであろう。
フランスは柔道の登録競技人口が五十万人を突破し、全日本柔道連盟への登録競技人口二十万人を大きく上

せ、即席に結果が欲しいのだ。「十年我慢すればものになる」等と言われても、十年後の世界が当てにならないことは、今の時勢を見れば若者にだってわかる。また情報手段が豊富になって、結果が見えたこともある。伝統芸能で何十年も滅私奉公、下積みする結果が、トップの人達でさえ苦労している。困窮の中にいることもある。決して左うちわの優雅な生活が待っているわけではない。となると最初からやる気がなくなる。八〇年代にはまだ希望があった、先が見えなかったからこそ希望だったにせよ。

寿司握りの下積み、板前の追いまわしから始め、揚げ場、焼き方、煮方と年数をかけて修行をするより、「米と酢と魚があれば、寿司なんてつくれる」「レストラン勤めが初めてでも、和食は作れる」的な発想の和食屋はフランスには横行しているし、消費者も高価で高品質で待ち時間の長い和食よりも、安価で手軽で、そこそこの和食を求めている。だから、それでも品質の違いはわかる。ひとにはわかるのだが、わかるひとだけでは、経営が成り立つほどの顧客数にならない。

経済的な問題といえば、古典を軸と

フランスには、日本の漫画が流行る前からバンドデシネ Bande dessinée と呼ばれる絵と吹き出しで構成された本 (Manga) の冒険、その他で知られる () があつたのだが、日本のマンガは特にその中で (Manga) と呼ばれている。多くの日本のTVアニメも仏語に吹き替えられて放映されている。「トフコンポーレ」ガブラスの仮面『ヘルサイユのぼろ』『NARUTO』『ONE PIECE』キャプテン翼等が多く仏人家庭の子供達、またマンガを愛好する大人達に鑑賞されている。

私は、甥や息子に勧められて観たのがきっかけで、岸本斉史の『NARUTO』という漫画をずっと追っかけている。これは週刊少年ジャンプに連載されたものが原作だが、アニメ化されて映画化、ゲーム化もされ、その翻訳はフランスでは大変な人気がある。二〇〇九年の時点でフランス語版の単行本は各巻の平均売上が二十万部、合計五百万部以上を売り上げている。

『NARUTO』が私が感心しているのはその漫画の中での**日本の伝統文化の消化と消費である**。完全なフィクションな和の世界、その国、衣服、建物、風習すべてが、日本のある時代のある場

所を設定しているのではなく、すべてがフィクションであること。荒唐無稽であつても、ジャポネスクな雰囲気は味わえる。

岸本斉史は、その漫画をもともと日本の読者の為に描いたので、最初からガイジン向けに作られたものではない、というところに注目しよう。「フィクション」であるならば、時代考証が間違っているの、歴史に忠実でないのと言問題を避けられる。そこそこ異国趣味も満足させられる。ジャパン・ポップ・カルチャーは変てこな日本伝統文化の寄せ集めではあるが、これは平成の日本文化のひとつなのである。

さらにPOPの歪み

ジャパン・ポップ・カルチャーは、今日ではとても日本的なのである。「これこそ日本」となっているのだ。今時、髪を染めた日本人が「不良だ」「欧米人の真似をしている」と言われることはまずあり得ない。「日本人とは髪を染めているもの」になつている。

また、国際化がこれだけ進めば、日本人は外国のどこでもひろがる見られるので、日本人といつて思い浮かべるのは、彼らの職場や学校にいる日本人、同

僚、同級生、隣人としての日本人である。日出する国のフジヤマガイシャのイメージでも待てもない。「日本人の女の子」で思い浮かべられるのは、きゅりーぱみゅぱみゅのような女の子であり、和服を着た黒髪の女性ではない。

ここで、日本おたくの人々の反応は、と言えば、「なんちゃって着物が出てこよう」としやちほこを逆さまに施した城があるように、POPに対しては、彼らは目くらまを立てないのである。相好を崩し、眼を細めて見ているのである。

最近の日本からの輸入文化は (Kawaii) ファッションである。日本人の若い女の子というのはなにかと「キヤーツ、かわいー」と、かわいーを連発するものであるが、この Kawaii ショップには本当に可愛い小物が売っている、というより、そういう女の子の好むものを置いている。そういう Kawaii ファッションの店がフランスにも登場している。

また、不気味なことに「コスプレがフランスでも流行っている」。

「コスプレ」は「costume playing」の略としての「コスプレ」ではなく、「kospuraj」と書く日本語の単語としての「コスプレ」である。漫画の登場人物

の扮装をして漫画の世界と一体化し、変身願望を満たす、これがお金も手間もたぶりかけられ、仕上げもなかなか子供の遊び以上のクオリティで、成人した人々が血道を上げる遊びとなつているのである。

その「コスプレ」のせいもあつて「外観さえ整えば、なんとかなる」と思い込む人々が増えるのではないかと、小社によく「舞台で着物を着たいので貸して下さい」「白塗りの道具が売つているところを教えてください」という電話が来る。それも見知らぬ人々がサイトを見て連絡して来るのだ。彼らは日本舞踊も舞踏も修練したことがない、ただ「着物さえ着れば日本舞踊が踊れる」「白塗りさえすれば舞踏公演が出来る」と安易に思っている。そういう人々が「日本舞踊公演」や「舞踏公演」をやつてしまつて時世なのである。

とはあれ、フランスでのジャパン・ポップの流行に乗って、現代美術家の村上隆も二〇一〇年にヴェルサイユ宮殿で展覧会を行うまでになり、毎年開催されるジャパン・エキスポの入場者数は現在も今なお増え続けている。

POPのアーティストは「普通の人」であり、等身大であり、カリスマではな

い。舞台にはもう魔力は無い、神秘的な力は無いという開き直り。大体POPというのは歪められたもの、キッチュなもので、自然ではない。一見明るく楽しそうに見えるPOPの底に流れるものは厭世と諦観である。

融合・縦の融合

(先の時代のもつと現代のもの)

それでも『NARUTO』のマンガは縦の融合としては成功した方だと思つ。融合ほど難しいものはなく、下手をするとな方の良さを失つてしまつ。

二〇〇四年、エティンバラ演劇祭で、ドビュッシーのオペラ『ヘレアスとメリザンド』が現代の日常的な服装と装置で上演されたものを観劇した。しかしどうも反響がいまひとつだった。中世ヨーロッパの物語を外側だけ変えても王太子の后と王太子の弟の道ならぬ恋という内容を、白い壁のアパートの中でジャーミングした人物が演じるものが魅力的になるはずがない。

日本舞踊歌舞伎の人々が、過去の踊り、過去の作品を現代風にアレンジしたものは多く見かける。日本髪を紫にしたり、着物にラメやレースを入れる、現代の歌曲曲で日本舞踊を踊る、等。

残念ながら、他でも、古典の人々が現代的にアレンジしたもので満足いく作品を見たことがない。古典の舞台ではあれだけ素晴らしい人々が何故か、と首を傾げたくなる感じなのだ。慣れない、無理なことごとをやつているといふ、心地の良くない印象しかない。主君の息子の代わりにわが子を犠牲にするというような内容が、いくら外見を変えても現代的になるはずが無い。演じられているテーマが現代にそぐわないのだ。

融合・横の融合(東西)

東西の融合の例として、アメリカの音楽で日本の古典舞踊、アメリカ人のダンサー達による日本の古典音楽でのモダンバレエ、Tシャツにズボンで扇舞を舞う、などの公演は何度も拝見したが、失礼ながらこの手の試みで成功例を見たことは少ない。論理的には納得のいく研究成果であるし、「コンセプトは領けるのだが、結果として出来上がった踊りに舞台芸術としての魅力がない。コレオグラフィアーのリサーチとして演らされたものであるから、踊り手の内面から迸るものが無い」。

例えば、日本舞踊家が西洋音楽で日

本舞踊を踊つた場合、そこに変化が顕われて然るべきなのに、頑として己の馴染んだ芸を繰り返しているだけ。つまり、AとBを混合すると反応が起つてCが出来るはずなのに、反応が起つていないからAとBが並べてあるだけのものしか得られない。つまりは踏み込みが足りないのだらう。

縦横併せ持った融合 現代美術的なセンス

東西の融合、そして伝統と現代性の融合に関して、最近、優れていると私が独断的に思ったものを二つ紹介しよう。ひとつは、村上純子という在仏日本人の女優さんで、本人が製作した創作日

本髪のかつら(写真)。江戸時代の風俗をそのまま復元しようと言うのではなく、オリジナルなものである。本物のりんごやビスケット型の木の扇を櫛、かんざしの代わりに用いている。簪は竹串である。そこはかとなく、押しつけのないユーモアも感じられる。

蟻川実花監督の「さくらん」に出て来る花魁達の髪、美術もひねつてあつて面白い。そうすると場末的な腐臭が感じられなく、粋である。しかしこれはたぶん「正統派」の江戸風俗を知つた上で見ると、いう前提付きである。日本文化初心者がアレンジものを見るのは危ないかもしれない。いや、これを日本文化愛好家になるきっかけにしてくれれば、あ



★Model, Wig: Junko Murakami
Make up: Junko Murakami, Gwendoline Abily



★Dancer, Costume, Wig: Geneviève Favre Petroff 2013

とは自身で勉強すればよいのだから。

もうひとつは、スイス出身のジュヌヴィエール・ファールペトロフが自演している『EVIDENCE』というパフォーマンス。これはつい最近、私が振り付けを手伝ったのだが、衣裳や髪のアイデア、製作は本人である。着物の形をした白い衣裳の表面に、透明の管が施されている。唄い踊りながら管に色のついた液体を流し込むと、管で形作った絵(コラージュ)的な、一筆描きの画が顕れる。

特筆すべきことは、この作品は着物を使う必然性があるところである。ただの日本趣味、異国情緒を入れる為に着物を使っているのではない。洋服が、

身体に沿って機能的に作られているの

に対し、着物はその中にある肉体を無視し、平面的、絵画的な世界を展開している。両袖を合わせる時顔の絵が形成されるので、合わせる仕草に必然性がある。唄のリリックと振りが描かれているものに、背中の虎の絵が顕われるときは虎の詞というようにリンクしている。ロンドンで仕入れた靴等がパンク色を添えている、等から味付けにもセンスが伺える。

現代美術系のパフォーマンスは、とかく一瞬芸になりがちなのに、これは時間芸術の計算もある。液体が管を通って流れ、ゆっくりと絵が顕われていく速

度、その時間と音楽の流れが一致し、振

りがリンクされている。それを試行錯誤しながら管の配置を換え、一致するところまで辿り着くのは全て手作業でなくては出来ない。そこに大変なローテク作業が要求されるころにも感心する。そして、これらの作品は、どれも根底に流れる精神が明るい。乾いて澄んでいる。古典の人々にある思い入れの深さや強い哲学、拘りや柵がないからこそ軽いフットワークで表現が出来るのだらう。

簡素な日本文化

伝統文化そのものでも、POPでも

なく、その混合でもないが、日本の現代的なカルチャーとしてフランスで評価されているものをここで挙げたい。シンプルでありながら奥の深いものを感じさせるすっきりとした世界観。ダンスで例を挙げると勅使河原三郎の舞台は、和楽器も着物も登場しないが、実に日本的なスタイルである。欧米で仕事をする日本の建築家、デザイナーが提供するもの、そういう簡素、高品質、ハイテクな日本を強調するもの。安藤忠雄、磯崎新の建築、三宅一生の服飾デザイン。グラフィック、ウェブデザインでも、日本人の洗練されたセンスは世界に受け入れられている。

この禅的な静謐、龍安寺の石庭のような無駄の省かれた侘び寂びの禅やミニマリストの哲学を表現した作品製品。不必要な加工も色も削ぎ落とした無印良品や統一感のあるユニクロのパリ店の商品は、日本的なものとして、素直に評価される。フランスで無印良品やユニクロの製品は、決して安くはないので、格安店のイメージは全く無い。

日本の古い映画では、昼間は履具は押し入れの中に仕舞われて、何も置かれない畳の部屋となる。そのすっきり感

しここに置かれ、壁も、絵や剥製や彫り物等あらゆる装飾品で空間恐怖症のように埋められた西欧の空間から見ると、なにもないというコンセプトは日本らしいのである。

しかしながら日本の現状は、何をどうでもかオスである。ごちゃごちゃと複雑な世界。日本のチラシ、広告、週刊誌、町並み、一般家庭の部屋の中の狭い中にやたらモノが積み込まれたドンキホーテ的な世界。例えば、私の本棚において

日本の書籍の並ぶ棚は、洋書の並ぶ棚と比べ格段に部屋的美観を損なっている。日本外の書物は白黒、ベージュ色が多く、質素で統一感があるが、日本の書物は背表紙も題字も色彩が過剰で、一冊だけ見ると悪くないのだが、並べたときの醜さは本棚にカーテンを掛けたらカバーを取り外して並べる等の工夫をしないと、とても受け入れ難い。

このみそぐそぐちやぐちやの状況は Fromage de tête (フロワージュ・テ・テット:豚の頭と足の煮凝り)のよつぱり種々な食材をゼリーで無理矢理固めたテリーヌの様である。そこに日本文化のパラドックスがある。

すっきりした状況を作る方が、余程難しいのだ。それだからシンプルなも



「今日、一般向

のが却って贅沢で、「何もない世界」が、アーティスティックな感動を与えてる。

フィードバック

二〇一〇年にパリ四区に日本人経営のクレープ屋「プリンセス・クレープ Princess Crepe」が開店した。ピンクと白の店内、ロリータ・ファッションの店員、Kawaiiの世界。

クレープというお菓子は、もともとフランスが原産地である。薄く焼いた小麦粉の生地にはジャムやバター、シユガー、ヌテラを塗って折り畳んだお菓子は、バナナ、いちご、アイスクリーム、生クリームをたっぷり入れ、豊富なトッピングのあるクレープ、東京原宿の竹下通りで歩き食いをする、あのクレープは

舞踏はどう進化するのか

日本のお菓子なのである。それが日本名物である鑑の食品見本のディスプレイ、Kawaiiのデコとセットで、日本の文化となったフランス文化を、フランスが逆輸入する。これはひとつのフィードバックだ。二〇一四年、四月には私は十七年振りに日本で公演するのだが、それはフランスの文化となった日本文化を、日本が逆輸入するものである。乞うご期待。

現在の舞踏は、発生当時と何が変わったのか? 「新しい舞踏は、肉体の露出は少なくなるが、大胆で現代的な動きが新しい反乱を表現する。この新しい美学にこそ結び付けられるのが、

有科珠々である(フランスMCMフェスティバル・パンフレット、文・ニラン・ワース・グリユン、ド1997)ことに加え、癒しや禅の要素が加わったこと。

けの舞踏クラスで教えられているのは、より穏やかなダンス、精神衛生の源のようなダンスである。舞踏は、自らの身体や感情を通した、存在物のあらゆる側面を探る手段、内的リズムを生む循環と調和させる手段なのである(フランス『Sante magazine』誌の記事「禅と舞踏」より、2006)

今日、私の作品で反骨精神や背德的美学や頹廢的要素は、ハイ生地のように底に敷かれていて、表面はクリームや果物で覆われているが、それでもわかる人にはわかるし、見える人には見えない。炙り出せば隠し絵が顕われる。しかし、一般の人々には露出しない。する必要がない。だから自分のカンパニーの若いダンサーたちは、舞踏の公演を両親が観に来ると言って嬉々としている。一般の市民から伝統芸能は歓迎され前衛舞踏は望まれないような、悲愴な歴史はもう繰り返さなくてよいのだ。

世界が元氣な時代に興ったアンダーグラウンドのユニバースは、ヨーロッパにきて発酵、変容し、疲弊した時代を経て癒しの要素が加わった。しかしどれだけ変わるうとも「傾き者」の要素は、どこかに確かに生きているのだ。